

創立七十周年と大学会館

一九五五（昭和三十）年、本学は創立七十周年を迎え、各種の記念事業や行事が盛大に行われた。

記念事業や行事については、『中央大学学報』一九卷一号が創立七十周年記念祭を特集して詳しいが、六月の明治神宮外苑での記念体育祭、十一月八（十日）の創立七十周年記念祭、翌年八月の中央大学会館落成式、『中央大学七十年史』や法・経・商・工・文学部の記念論文集の刊行等がその中心であった。過去の創立記念事業と比べてもその規模ははるかに大きかった。

このうち五六年八月に落成式を迎えた中央大学会館は、敷地面積四五〇坪、地下一階地上五階の鉄骨鉄筋コンクリート造りで、自家変電室、大食堂、大小会議室、宿泊室等を備えた冷暖房完備の立派な建物であった。会館は千代田区神田駿河台三一十一（現在の駿河台記念館の地）に総額約一億五、三〇〇万円をかけて新築されたが、その場所や規模は最初の計画とは全く異なっていた。

た。

五三年十月の七十周年記念事業寄附金募集委員会常任理事会で報告された計画案によれば、大学会館は、学員、学生が集会・談話・食事等に利用し、宿泊も可能な会館と、大規模な室内体育場とを併設したものととして後楽園に建築し、他大学の倶楽部のような入会金・倶楽部費も徴収しないで、外部の利用者の使用料で会館経営費をまかなおうという、当時としては他に例を見ることができないものであった。

具体的には敷地面積約三千坪、建築面積約一、九五六坪、地上四階七五〇坪の会館と、一周一三三メートルのトラックと約一万人を収容可能な観覧席を中心とする一、二〇六坪の体育館とを合わせた総合施設が企図されており、実現していれば、大学が経営する大スポーツセンターとしても高い評価を得たことであろう。

しかし、この計画は途中で大幅な変更を余儀なくさ

れた。最大の原因は資金不足である。約五億円の資金のうち二億円を募金でまかなう計画であったが、現実には集まった募金はこの段階では予定額にほど遠かった。一方、体育館計画に対して若手教員を中心とする「新人会」は、教学施設を充実すべきとして、図書館・研究室・学生の福利厚生施設等の建設の優先を主張していた。その後、計画は学員会館建設と図書館整備に切り替えられていく。

五五年五月の七十周年記念委員会では、計画を二つに分け、第一期とし

て会館建設を行い、二期以降に可能ならば体育館を建設すること、場所は、後楽園の敷地が一〇年間は運動施設に使用する条件で払い下げを受けたため、会館のみでは建設許可が得にくいため、本学講堂裏を候補地とするなど骨子とする構想が明らかにされ、原案通り承認可決された。

こうして大幅な計画変更の末、中央大学会館だけが建設されたが、その後の三〇年間、この会館は「学員相互が、あるいは学員と学校側とが、きわめて自由に会合し相寄り相語らい相楽しむことのできる機関」としての役割を果たしてきた。この役割は八八年同地に新築なった駿河台記念館に受け継がれている。

また当初の建設予定地であった後楽園運動場は六二年に理工学部校舎として生まれ変わった（現後楽園キャンパス）。



まぼろしの中央大学会館立面図